

口腔常在真菌Candidaの重要性

前田伸子

(鶴見大学歯学部口腔細菌学講座 教授)

深井穂博編集長殿

昨年は鶴見大学の母体である総持学園80周年記念シンポジウム“ボランティア なぜそこまでして行くのか”のシンポジストとしてネパールでのボランティア活動についてお話していただきまして、ありがとうございます。このシンポジウムの内容も改めてどこかへ寄稿したいほどの充実したものでしたが、今回は私がオーラルケアの重要性を身にしみて実感し、現在の研究のメインテーマである口腔常在真菌Candidaの研究を始めたきっかけについて書かせていただきます。

今から13年前の平成4年6月、母が妹の自宅兼診療所（静岡県藤枝市）で脳出血のため突然倒れました。横浜の自宅から父が、出張先の郡山から私が藤枝市民病院にかけつけたとき、母はまだ手術室でした。手術は無事に終了しましたが、意識は戻らず、いつどうなるもおかしくない状態が約2ヶ月続きました。その間、妹は歯科診療を、私は大学での仕事をほぼ全面的にストップし、交代で母に付き添いました。妹と私はそれぞれ10年以上におよぶ臨床経験あるいは口腔細菌学の研究経験があるにも関わらず、脳血管障害に関する知識はほぼゼロで、ただ身の回りの世話しかできず、この時に感じた無力感は表現しようもありません。主治医たちは一応私たちを同業者として見なして、他の付添の方よりも丁寧な説明をして下さいました。しかし、私たち自身が歯科医として学んできた知識や技術は介護の現場では何の役にも立たないと思い始めていました。そんなある日、母の歯磨きをしている妹（ちなみに、この時まだ

母の意識はなく、口から飲食物の摂取はなかった）を見たある看護師さんが、「お母さんは専門家にお口をきれいにしてもらえて幸せですね。お口のなか汚いまだと、そのせいで熱が出て、それが大事に至ることが良くあります」と声をかけてくれました。彼女のその言葉はやや大げさな表現かもしれませんが、看護の場での歯科医療従事者の存在価値を示してくれたようで、私たちの揺るぎかけた自信を取り戻す良いきっかけになりました。母がいた病棟のベッドは例外的な2～3名の若い方以外は脳血管障害の後遺症のある高齢者の方で占められていました。付添いの方たちは明らかに口腔ケアまで手が回らないらしく、2名の歯科医（妹と私）がつきっきりで口腔ケアをしている母のような患者さんはもちろん一人もいらっしゃいませんでした。ようやく、母の意識が戻り、曲がりなりにも意志の疎通が図れるようになりましたが、手足は全く自力では動かせない状態でした。強い嚥下障害があった母にリハビリとしてトロミ食を与えるのが妹の役目、その際に当然起こる誤嚥の結果として気管に入り込んだ食物を吸引チューブで除去するのが私の役目とこれ以外の様々な介護の役割分担も決まり、ゆっくりではありますが、徐々に母の状態が改善されていきました。そんな矢先のある深夜に容体が急変した母は結局8ヶ月にわたる闘病生活の甲斐もなく、亡くなりましたが、私たちは出来うるかぎりの看護・介護ができたと今でも信じています。

母の死後、大学での研究・教育に全面的に復帰した私に「高齢者の全身的な健康と口腔の健康の

関連を調べる」プロジェクトへの参加のお誘いがありました。この時ほど、全ての物事は偶然ではなく、なにか必然的な巡り合わせのようなものがあるのではないかと感じたことはありません。私に与えられたテーマは数ある口腔常在微生物の中で全身状態の指標となるうる微生物を選定し、それが加齢や全身あるいは口腔局所の状態の変化と具体的にどのような関連を持つかを調べることでした。被検者は岩手、新潟、福岡、愛知の満80歳の健康な高齢者です。大掛かりな疫学調査ですから、培養の難しい微生物を選ぶわけにはいきません。文献検索の末、口腔衛生の指標として利用価値が高いと指摘されていたCandida^{1, 2}を口腔の健康状態を示す指標微生物として選び、その分離率と半定量的な菌数を調べました。この時の結果を基礎として、高齢者、とくに母のように要介護になった方たちを含む易感染宿主の全身・口腔の健康の維持を目指した「易感染宿主における日和見感染予防を目指した口腔細菌学的研究」を平成10年～11年度の文部科学省基盤研究として申請しました。幸いにも、この研究は採択され、Candidaを中心に数種類の微生物の分離率・菌数の疫学的研究をすることができました。これらの数年にわたる疫学調査から、加齢によりCandidaの分離率・菌数ともに上昇すること、全身状態が悪ければ悪いほど本真菌が口腔内に増加することが明らかになりました。また、局所的要因としては義歯の装着と唾液分泌の低下により本真菌が増加すること、増加に伴い、微弱なカンジダ症を引き起こし、それが舌痛や口腔内の原因不明の違和感、不快感の原因になることも分かりました。その後、Candidaに関する研究は疫学調査にとどまらず、その病原因子や口腔に存在する抗菌ペプチドの関連を検討する研究へと進展していき、現在、数名の大学院生や学部学生さんたちが興味を持って取り組んでくれています。

本来ならば、生体と共生関係にあり、私たちに悪さをしないはずの常在真菌Candidaの病原性発揮のメカニズムに関する研究への興味は尽きません。そのきっかけを与えてくれたのが妹とともに

母を介護した経験でした。

文 献

- 1) 浜田泰三：デンチャーブラックコントロール。永末書店、京都、1983
- 2) 駒井 正：寝たきり老人の全身管理と口腔衛生。歯科ジャーナル、33；419-426、1989

【著者連絡先】

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3

鶴見大学歯学部口腔細菌学講座

前田伸子

Tel：045-581-1001 Fax：045-573-9599

E-mail：maeda-n@tsurumi-u.ac.jp